

令和 6 年 6 月 14 日現在

機関番号：32508

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2019～2022

課題番号：19H03928

研究課題名(和文) 看護実践に特化した健康生成論とストレス対処力概念SOCに関する応用モデルの開発

研究課題名(英文) A development of an application model based on salutogenesis and sense of coherence focused on nursing practice

研究代表者

戸ヶ里 泰典 (Togari, Taisuke)

放送大学・教養学部・教授

研究者番号：20509525

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 13,300,000円

研究成果の概要(和文)：管理・教育を含む広義の看護実践において対象の身体的心理社会的な資源の活用力・動員力概念でもあるストレス対処・健康生成力概念sense of coherence(SOC)への着眼が進んでいる。SOCの基盤的視座である健康生成論に基づいた看護実践への応用に向け実証研究および理論的整理を通じて検討した。関節リウマチ・パーキンソン病・精神疾患などの慢性疾患患者、HIV陽性者、LGBTQ当事者、一般病院・精神科・高齢者施設勤務の看護師、介護士を対象とした実証研究、健康生成論的アプローチ、アセットアプローチ等の諸理論を踏まえ、看護の対象(看護職・患者・当事者)の心理社会的適応への支援モデルを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

医療の高度化、高齢化が進む中、医療・福祉の専門的サービスを必要とする人々が増えている。その中で良い看護サービスとは患者に効果的な治療を提供し治癒を目指すだけではない点が強調されてきた。近年看護学でよく扱われているSOCというストレス対処・健康生成力は、健康生成論という、病気の原因を探り除去する医学的立場とは対立する健康の要因を探り促進する立場に基づいている。SOCや健康生成論の観点で看護を研究することを通じて、例えば、患者が失ったものを取り戻すだけでなく、今あって強みになるものを見出すことや、専門職権ではなく人権を尊重すること、適応する力・生きる力を支援するといった方向性を見出すことになった。

研究成果の概要(英文)：In nursing practice in a broad sense, including management and education, attention has been focused on sense of coherence (SOC), a concept of stress-coping and salutogenic ability that is also a concept of the ability to utilize and mobilize psychosocial resources. We have examined the applicability of SOC to nursing practice through empirical research and theoretical organization, based not only on SOC but also on the health-generating theory on which it is based.

We conducted empirical research on patients with rheumatoid arthritis, Parkinson's disease, and psychiatric illnesses, HIV-positive people, LGBTQ people, nurses and caregivers working in general hospitals, psychiatric departments, and elderly care facilities. We then synthesized various theories, including the health-generating approach and the asset approach. We clarified a model for supporting the psychosocial adaptation of nursing targets (nurses, patients, and patients concerned).

研究分野：基礎看護学；健康社会学

キーワード：健康生成論 首尾一貫感覚 アセットアプローチ 慢性疾患患者 セルフマネジメント 適応

## 1. 研究開始当初の背景

健康社会学者アロン・アントノフスキーは、近代医学における支配的な学問的スタンスである「何が疾病をつくるのか」という問いを発する立場を疾病生成論 (pathogenesis) と位置付けた。疾病生成論はリスクファクター (危険因子) を探索し、それを除去することが中心の学問的営みである。そのうえで、この疾病生成論に対峙する学問的立脚点として、「何が健康をつくるのか」という問いを発する立場である健康生成論 (salutogenesis) を提唱した (Antonovsky, 1979) 健康の維持増進につながる要因をサリユターファクター (健康要因) と呼び、健康要因を探求し構築し提供する学問的立場が健康生成論である。健康生成論と疾病生成論は車の両輪のように同等に重要であるが、疾病生成論に比べて健康生成論の発展が著しく遅れていることにアントノフスキーは警鐘を鳴らした。なお健康生成論はその後提唱されたオタワ憲章にはじまる WHO によるヘルスプロモーションの哲学的基礎となっている (Eriksson, 2008)。健康生成論をベースに理論モデルとして提案されているモデルが健康生成モデルである。日本国内においても健康生成モデルの中核概念である Sense of Coherence (SOC) を用いた研究が多く行われるようになってきており、その中でも看護学領域が最も多く実施されている傾向にある。

しかし現行の研究成果を踏まえるといくつかの点で問題があり、研究成果が看護の実践に十分に繋がっていない。まず、集めている研究関心の偏りである。例えば、看護師の SOC がメンタルヘルスと関連するという研究はきわめて多く見られている。他方、労働者対象の研究では、職場風土や心理社会的職場特性の SOC への影響が次々明らかにされているが、看護領域ではほとんど見られていない。もう一つは看護の対象である患者や障害者、当事者に対する看護の観点での SOC に関する研究はまだ十分に行われていない。疾患や障害への適応やセルフマネジメントと SOC は密接に関係することが多くの研究からわかっている。看護実践と健康生成論および SOC との高い親和性がある点からも、対象の SOC の向上、SOC が低い対象への援助に関するアプローチを明確にモデル化することが期待される。

### **精神疾患患者における復職・就労と服薬管理・症状管理に関する健康生成論的研究(研究1)**

精神障害者の自立支援に向けた動きが進んでおり、精神疾患を持つ人の復職・就労が課題となっている。特に精神疾患を持つ人の復職・就労には症状・服薬のセルフマネジメント能力を獲得していることが必要とされる (森谷他, 2014)。慢性疾患セルフマネジメントプログラム (CDSMP) は自己効力感理論に基づいた介入プログラムであり、CDSMP は精神疾患を持つ人にも有効であることがわかっている (宇佐美 他, 2009)。精神疾患患者に共通し、医療者の介入・支援と服薬管理・症状管理、職務満足度と自己効力感の関連を明らかにすることを目的とする。

### **看護組織の SOC スケールを作成、信頼性と妥当性を検証(研究2)**

Sense of Coherence (SOC) は、個人のみならず社会的集団や組織単位にも適用できる (Antonovsky, 1987)。集団・組織には それぞれをとりまく社会文化的背景によって多様な SOC が存在し (Kuo, 2013; Heppner, 2008)、個人のストレス対処に関連するだけでなく、集団・組織全体が直面する集合ストレス (collective stressor) に対しては、個人の SOC よりも効力を発揮する。その傾向は、集合意識が強く、自己アイデンティティと社会的アイデンティティが深く結びついている集団・組織において特に顕著 (Antonovsky, 1987) とされている。看護職は、診療部門に応じて病棟などの部署に組織化され、看護体制や看護方式は部署単位で決定される。また、チームでサービスを提供するため、集合意識が強い。基礎教育課程の段階から職業アイデンティティが形成されることから、組織としての SOC が作用しやすい職種のひとつと考えられる。集団レベルでのストレス対処力は、集団・組織を構成する個人の心理や健康にも影響を及ぼすことが明らかになっており (Ortiz et al., 2020; Ngai & Ngu, 2013; Möllerberg et al., 2019; Heppner et al., 2006)、看護組織の SOC は、組織のパフォーマンスだけでなく、組織の構成員である看護師個人の well-being にも関連する重要な概念であると考えられるが、看護組織の SOC を測定するツールは見当たらない。

### **認知症病棟勤務看護師のストレスと SOC に関する研究(研究3)**

国内の認知症施策において、看護師をはじめとする医療従事者の認知症対応力向上が謳われている。認知症入院患者総数の約 7 割が精神科病院に入院しており、精神科病院は認知症医療の中心的な役割を担っている。しかし、認知症看護においてケアの難しさがあることが明らかとなっており、ケアの難しさは看護実践するための士気を下げ、看護師の職務継続や看護師自身の精神的健康、ケアの質にまで影響することが明らかとなっている。そこで精神科病院における認知症看護の実践と質の向上を期すため、精神科看護師が直面している困難についてその実態を明らかにし、困難を減らす方を講じていくことが望まれる。

### **介護老人保健施設の看護職と介護職の心理社会的職場環境と SOC に関する研究(研究4)**

介護・医療従事者の中でも従事者数の多い介護職と看護職の人材確保は、持続可能な介護・医療提供体制の維持にとって重要である。また、2024 年 4 月から時間外労働の上限規制が医師にも適用されることになり、タスクシフト/シェアが議論されてきた。介護・医療従事者には、タスクシフト/シェアを通じた業務負担の最適化と医療の質の確保 (厚生労働省, 2017) を同時に満たす取組が求められている。

社会経済構造の変遷に伴って、仕事によるストレスは労働者の健康に影響をもたらしてきた。先行研究では、心理社会的職場環境は介護職や看護職の身体的ストレス (音山 & 矢富, 1997)、精神的ストレス (阿出川, 淡下, 金子, & 他, 2014; 矢富, 1996) に影響することや、ケアの質と関連していること (Castle & Engberg, 2005; 呉, 2013; 福岡, 2013) が明らかになっている。

## 日本国内在住のLGBTQ+の人々におけるSOC(sense of coherence)(研究5)

井上らは、2013年以降、HIV陽性者でのSOCに着目した日本国内千人規模の調査を概ね3年に一度実施してきた。SOCが一般住民調査と比較して全体としてかなり低いこと、しかしそれがHIV感染に起因するものなのかHIV陽性者の多数を占めるLGBTQ+(主には性自認が男性のGB(ゲイ・バイセクシュアル))であることに起因するものなのか、把握できていなかった。そのような背景もあり、MSM(男性と性交渉のある男性)ないしはLGBTQ+層におけるSOC調査はきわめて重要とかねてから当事者らにも言われていたが、実現してこなかった。国内外の先行研究を調査すると、LGBTQ+層におけるSOC研究はきわめて少ない状況であった。ただ、少ないながらも、全体としてSOCが低いのではないかと推察される研究がいくつか存在した。たとえば、Fish J, et al(2019)が英国のLGBがん患者30人を対象とした調査では、自身がLGBであることをカミングアウトすることで、支援のための資源に繋がり、SOCやレジリエンス向上が望める健康生成的な環境に繋がるとしていた。また、スペインの15歳から18歳の1212人のトランスジェンダーを対象とした調査研究(Ciria-Barreiro, 2021)では、シスジェンダー、バイナリーの人に比べて、ノンバイナリーでSOC得点が低いと報告されていた。

## 関節リウマチ患者の心理的適応の評価に関する尺度の開発、ならびに心理的適応と身体心理社会的健康との関連(研究6)

関節リウマチ(以下、RA)は、病気の発症早期から痛みや関節破壊が著しく苦痛の大きい病気であることが一般的に知られている。そのため患者には、うつや適応障害が起こっている場合も少なくない。特に発症から2年までの早期患者は、激痛や日常生活動作への対処が困難なため、自信、自尊感情、自己効力感が低下していることが多く、外見上で障害が著しい長期患者より、心理的にはより支援が必要なが研究結果でも明らかとなっている。一方で、RA患者達は病歴を重ねソーシャルサポートをうまく得ることや日常生活への対処がうまくなり、次第に病気そのものと共にうまく生きる、つまり適応的になることも質的研究結果で明らかになっている。

## パーキンソン病患者の生活適応・セルフマネジメントとヘルスリテラシーおよびQOLに関する調査研究(研究7)

パーキンソン病は慢性の神経変性疾患であり、根治療法のない難病である。長期間の療養生活では身体機能や健康関連Quality of life(以下HRQOL)の維持が重要である。しかし、パーキンソン病患者のHRQOLは健常者と比較して低い(Zhao et al. 2021)。パーキンソン病患者のHRQOLは運動症状と非運動症状に影響を受けるため、その認識と管理が重要であり(Kurihara et al. 2020)、最適なケアとHRQOLの向上のためには病気の症状や治療法に関する知識も必要である(Beitz 2014)。病気の知識を病気の自己管理に活用する力の一つとしてヘルスリテラシーがあり(Nutbeam 2015)、パーキンソン病においてもヘルスリテラシーが低いことは介護者の負担の増加や重症度、有害転帰に関連する(Fleisher et al. 2016)。パーキンソン病患者に対するリハビリテーション介入にセルフマネジメントを取り入れることでHRQOLは改善する(Tickle-Degnen et al. 2016)が、ヘルスリテラシーが低いとセルフマネジメント能力を高める行動を制限される可能性がある(Mackey et al. 2016)。

パーキンソン病患者のHRQOLの維持・向上のためには病気を理解するヘルスリテラシー、理解したうえで適切に病気を管理するセルフマネジメント能力が重要であると考えられるが本邦においてパーキンソン病患者を対象としてこれらの関係性を調査、検討した報告は少ない。

## 看護実践における健康生成論とストレス対処力概念SOCの応用(研究8:総合考察)

健康生成論およびSOCに関連する一連の理論と看護実践の在り方の関係を模索する。「看護実践にどのようにSOCを活用・応用できるのか。健康生成論とSOCに関する看護への応用モデルはどのようなものとなりうるのか」というサーチュクエスションを掲げて理論的統合を目指す

### 2. 研究の目的

(研究1)精神疾患患者に共通し、医療者の介入・支援と服薬管理・症状管理、職務満足度と自己効力感の関連を明らかにすること

(研究2)看護組織のSOCスケールを作成し、信頼性と妥当性を検証する。

(研究3)精神科病院・精神科病棟に勤務する看護師を対象に、認知症患者にケアを行ううえで難しさを生じているのか、また、どのような難しさが生じているのか、心理測定方法論に基づいて他項目尺度を開発し、実態を明らかにすることを目的とする。

(研究4)介護老人保健施設の看護職と介護職の心理社会的職場環境と位置づけた労働職場特性、職場風土、協働と個人要因としてのストレス対処力Sense of Coherence(以下、SOC)が心身健康とケア実践に与える影響を、マルチレベルで検討すること

(研究5)日本国内のLGBTQ+の人々におけるSOCの高さを、日本在住の人々の基準値と比較検討すること。LGBTQ+の人々におけるSOCと、地域特性、SOGI、LGBTQ+スティグマ関連体験多寡との関連を明らかにすること。

(研究6)RA患者の心理的適応の評価に関する尺度を開発し、RA患者の心理的適応と身体心理社会的健康との関連を探求すること。

(研究7)パーキンソン病患者のヘルスリテラシーがどのようにHRQOLに影響を与えているのかを検討することにある。本研究ではヘルスリテラシーが良好であるとセルフマネジメント能力が良好であり、HRQOLが良好であると仮説を立て、検証を行うこと。

(研究8:総合考察)各研究プロジェクトの実施状況・成果報告を統合し研究者間でディスカッションを重ねることで、本研究プロジェクトの到達点としての健康生成論およびSOC概念がどのようにSOCに応用することができるのかを明らかにする。

3. 研究の方法(研究者が所属する機関の研究倫理審査の承認を得て実施した。)

(研究1)横断調査デザインで、2020年7月~8月精神科単科病院に外来通院している患者を対象に自記式質問紙調査を実施した。1126名に配布し有効回答数は708名(62.9%)であった。そのうち20才以上65才以下の670名を分析対象とした

(研究2)2020年2月に、首都圏の8病院(約300~900床規模)に勤務する看護師3316名を対象に、自己記入式質問紙調査を実施した。1933名分の有効回答を分析対象とした。

(研究3)横断研究デザインで、2021年1月~6月に北海道と東北地方の精神科救急入院料病棟看護師295名を対象とした自記式質問紙調査を実施し230名より回収した(回収率78.0%)。

(研究4)研究デザインは横断研究で、2022年6月から7月にA県に所在する全介護老人保健施設195施設うち意の得られた31施設看護職205名介護職287名を調査対象とし自記式質問紙調査を行い、看護職180名、介護職209名(有効回答率79.1%)を分析対象とした。

(研究5)ウェブ調査会社A社に「男性」としてモニター登録し、かつヘテロセクシュアルではないとする日本国内在住の20-50歳を調査対象とし、ウェブによる無記名自記式質問紙調査を実施した。調査実施期間は2022年11-12月。984人から回答を得て分析対象とした。

(研究6)2022年1月~6月に、国内5病院の20歳以上の外来RA患者 Webか質問紙調査に自発的参加できる者を対象に実施した。

(研究7)自記式質問紙法による横断研究である。近畿地方2府のパーキンソン病患者団体に依頼し、調査票を配布し、郵送で回収した。患者団体に所属する調査票を配布したパーキンソン病患者691名のうち、203部を回収(29.4%)、そのうち各質問項目に欠損値が半数以上あるものを除外し182部を分析対象とした(有効回答率89.7%)

#### 4. 研究成果

(研究1)症状管理に関する介入・支援は治療行動に対する自己効力感、症状管理行動に対する自己効力感、PHCSに正の関連があった。薬効・副作用に関する介入・支援は症状対処行動に対する自己効力感、PHCSに負の関連があった。薬の飲み間違い・飲み忘れへの介入・支援は治療行動に対する自己効力感に負の関連があった。症状管理に関して取り組むことは治療行動に対する自己効力感、症状対処行動に対する自己効力感、健康管理能力の向上に有効である。復職・就労を希望し、仕事への適応の認知には、症状対処行動に対する自己効力感に着目し、症状管理に関する介入・支援を行うことが効果的である。服薬管理について、成功体験や代理体験を促し自己効力感を獲得できるよう、また、患者の治療行動・症状対処行動を包括的に捉えた介入・支援を検討する必要性がある。

(研究2)対象者の基本属性1933名分の有効回答を分析対象とした(有効回答率58.3%)。回答者の平均年齢は $33.0 \pm 9.7$ 歳、女性が89.9%、看護師経験平均年数は $9.9 \pm 9.0$ 年、部署経験平均年数は $3.6 \pm 3.2$ 年であった。誤差共分散修正16項目版モデルはCFIが.915、RSMEAが.077と最も適合度が良好であった。16項目版スケールのI-T相関は全て.50以上であり、スケール全体のCronbach's係数は.912であった。誤差共分散修正16項目版スケールと仕事満足度( $r=.451, p < .001$ )、16項目版スケールとWork-SOC( $r=.638, p < .001$ )とは、それぞれ有意な正の相関がみられた。

(研究3)対象の平均年齢は40.81歳(10.08)、看護師経験年数16.07年(10.56)、精神科看護経験年数は10.65年(8.14)であった。探索的因子分析では、8因子の一因子性を確認、因子間相関0.45~0.94と比較的強い~強い正の相関がみられた。因子は、認知症患者に対する看護実践能力を身につけることの難しさ、認知症患者に対する個性や状態に対応したきめ細やかなケア実践の難しさ、認知症患者に対する多様で度重なる愁訴や不測の行動への対応の難しさ、認知症患者に対する日常生活活動支援の難しさ、と命名した。因子は、食事、排泄、整容・入浴、移動、睡眠、5項目から構成される。各因子において係数を確認、0.885~0.954の範囲にあり、全てが基準値を上回っていた。確証的因子分析では、モデルの適合性指標を求め、一定のモデル妥当性を示した。

(研究4)心身健康度を被説明変数としたマルチレベル分析を行った結果、介護職では、SOCが高いほど心身健康度は改善するという有意な関連性が認められ、個人レベルの職場風土良好度が高いほど心身健康度は改善するという有意な関連性と、労働職場特性から受ける負担の度合いが高いほど心身健康度が低下するという有意な関連性が認められた。看護職では、SOCが高いほど心身健康度は改善するという関連性が認められ、個人レベルの職場風土良好度が高いほど心身健康度は改善するという関連性が認められた。ケア実践への自信を被説明変数としたマルチレベル分析を行った結果、個人レベルの職場風土が良好であるほどケア実践への自信が高まるという関連性が認められた。

(研究5) SOGI(性的指向と性自認)の考え方をもとに独自に設問を設定し「ゲイ・バイセクシュアル」「トランスジェンダー」「ジェンダーニュートラル」「クエスチョニング」「その他」の5分類とした。SOGI分類別人数は以下の通り:ゲイ・バイセクシュアル:262人、トランスジェンダー77人、ジェンダーニュートラル:79人、クエスチョニング:413人、その他:153人であった。全国男性基準値と比べ、LGBTQ+ではSOCが大幅に低い結果であった。また、通常は年齢階層が上がるとSOCが高くなるとされ、日本国内の調査結果でも同様の傾向があるが、本研究の結果では年齢階層が上がってもSOCは高くならないという特徴があった。SOCスケール得点を従属変数、年齢を共変数とした共分散分析を実施した結果、SOGI分類別のSOCスケール得点には有意な違いが認められなかった。LGBTQ+スティグマ関連体験多寡得点と、SOCスケール得点との偏相関分析(年齢を制御)の結果、 $r=-0.09$  ( $p < 0.01$ )となり、LGBTQ+スティグマ関連体験が多いほど、SOC得点は低くなった。LGBTQ+スティグマに関連した体験がSOC向上を妨げている可能性が示唆される。

(研究6)208人(Web118,質問紙90)が有効回答した。確証的因子分析による適合度判定で5因子(1:リウマチの症状コントロールへの自信,2:リウマチである自己に対する肯定感,3:リウマ

手患者間のピアサポート,4: 統制感,5: 利他主義)25 項目モデルで適合度 (CFI=0.923, RAMSEA =0.059)が良好となった。併存妥当性では, 日本語版 Recovery assessment scale(千葉ら,2011)と正の相関 (r=0.553, p < 0.001),HADS との負の相関(r=-0.262, p < 0.001),が証明された。RA 患者の心理的適応」に影響する身体心理社会的健康要因の結果、女性 84.2%,平均年齢 63.6 年,平均 RA 歴 15.6 年だった。総得点に有意差があった項目を独立変数,RAPAS を従属変数とし強制投入法による重回帰分析を実施した。有意水準 0.05 を満たしたのは,RA 経歴( =.17),CRP( =-.23),ヘルスリテラシー( =.35),SOC( =.28)の 4 変数で, 調整済み決定係数=.41 (p < .0001)だった。

(研究 7) パーキンソン病患者のヘルスリテラシーは糖尿病患者で行われた先行研究[8]と比較して機能的ヘルスリテラシーが低く、相互作用・批判的ヘルスリテラシーが低かった。これはパーキンソン病患者のヘルスリテラシーの特徴である可能性がある。HRQOL を従属変数とした重回帰分析は性別、年齢、罹病年数、重症度で調整し、独立変数を FCCHL の下位尺度、各セルフマネジメント能力とした。その結果、PDQ-8 には機能的ヘルスリテラシーと症状のセルフマネジメント、社会生活のセルフマネジメントが関連することが分かった。

(研究 8 : 総合考察) 2013 年に Nursing Times 誌上で 2 回にわたり、アセットアプローチ(asset based approach)と看護についての特集が組まれた(Henry, 2013b, 2013a)。このアセットアプローチとは、Morgan らにより健康生成論を基盤として提唱された欧州における健康の不平等対策に向けた公衆衛生アプローチのモデルである。健康生成モデルにおいては汎抵抗資源と呼ばれていたがこれをアセット(asset: 資産)と置きなおし、健康生成論は学問的立場であったが、課題に対してより実践的に活用可能な立場として描きなおしたモデルと言える(Mittelmarm et al., 2016)。そして、疾病生成論に対応する形で欠損(deficit)アプローチが言われており、アセットアプローチへの転換が必要とした(表 8-1)。これを踏まえて看護は患者にとってのアセットとして機能していることについて議論が必要であることが言及された(Henry, 2013b)。看護師は、患者に対する療養にかかわるタイムリーかつ理解しやすい情報の提供者であり、生物・心理・社会的各側面からのケア提供者・支援者、かつケア・支援のコーディネーターと言える。健康生成論やアセットアプローチの考え方からすると、汎抵抗資源・健康資産を患者本人に認識させ、本人のために動員するすることが看護介入・看護支援そのものである可能性がある。また、患者が病いと共に生きることを意味付けの支援すること、生活・人生を送る際の意思決定の支援すること役割になっている。

こうした役割は健康生成モデルにおける SOC の機能に重なる。この観点から患者の SOC を向上させる看護師のかかわりは可能(Moons & Norekvål, 2006)と言われている。また、実際に向上につながるプログラムの開発は近年少しずつ増えており、看護系研究者によりそれが進められている現状にある。しかし、健康資源・資産や経験の意味を繰り返し確かめながら生活をしていく必要があることから先述のように SOC の向上は一朝一夕では成し遂げることができない。その一方で、Henry が議題として提起しているように看護師自身が資源・資産とみなし患者にかかわることは SOC が低い患者に対してきわめて効果が高いのではないだろうか。それも、患者の SOC に成り代わって資源の動員やストレスの意味づけに関わる中核となる資源として、である。ポジティブ心理学領域では、SOC や楽観性など様々な対処資源の動員にかかわる中核となる資源のことをキーリソース(key resource)と呼ばれている(Frydenberg, 2003)。SOC が低い患者に対しては、不足している SOC(出来事の把握、資源の認識・動員、出来事と対処プロセスの意味付け)が持つはずであった機能を看護師は補填しうつまり、看護師はキーリソースであるという論から新たな看護論が発せられるのではないだろうか。さらに低い SOC の患者だけでなく全患者に対して一般化し「良いケア・看護実践」を、以下の表のような健康生成論的アプローチならびに・アセットアプローチで整理していくことができるのではないだろうか。

**表 欠損アプローチによる看護実践と健康生成論/アセットアプローチによる看護実践**

欠損アプローチによる看護実践	健康生成論/アセットアプローチによる看護実践
患者/看護職/職場の足りないものや必要なものを見つけることから始める	患者/看護職/職場にある資産(アセット)・資源を見つけることから始める
患者/看護職/職場に不足することなどの問題を解決する形で対応する	能力や力、長所など、患者/看護職/職場に今あるポジティブな資源を特定する
患者/看護職/職場にサービスを提供する	患者/看護職/職場に(時間やエネルギーなどを)投資する
専門職や病院、公的機関などの権力を強調する	人間性・基本的人権を強調する
個人に焦点をあてる	組織・グループ・ネットワークに焦点をあてる
患者・当事者・看護職など対象の人々は受動的な存在として扱う	対象の人々が自分の日常/職業/療養生活をコントロールでき適応できるように支援する
患者・当事者・看護職など対象の人々を正しい方向に導く	能力・適応する力・生きる力が伸びるように人々を支援する
最終的に解決プログラムを実装することを目指す	最終的に対象の人々を見守り、逆に人々から学ぶ

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計20件（うち査読付論文 15件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 5件）

1. 著者名 竹内朋子, 戸ヶ里泰典, 山西文子.	4. 巻 26
2. 論文標題 看護組織のSense of Coherenceスケール -信頼性と妥当性の検証-. 日本看護管理学会誌, 26(1), 2022, 86-93.	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 看護管理学会誌	6. 最初と最後の頁 86-93
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.19012/janap.26.1_86	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 神崎初美・戸ヶ里泰典・畑真紀子・井上満代・日高利彦・黒木喜美子・村澤章・三浦靖史・松井聖	4. 巻 -
2. 論文標題 関節リウマチ患者の心理的適応尺度の開発, 臨床リウマチ	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 臨床リウマチ	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 神崎初美, 小迎森美帆, 三村綿名, 田村理紗	4. 巻 4
2. 論文標題 関節リウマチ患者の心理的適応に関する文献レビュー	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 日本リウマチ看護学会誌	6. 最初と最後の頁 1-8
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 神崎初美, 金外淑, 大西亜子, 田中由紀, 高橋直美, 大西誠	4. 巻 33
2. 論文標題 リウマチ看護師の「聴く力」を強化する教育介入プログラムの看護実践能力向上への効果	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 臨床リウマチ	6. 最初と最後の頁 320-328
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.14961/cra.33.320	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 神崎初美, 井上満代	4. 巻 33
2. 論文標題 リウマチ看護師の看護実践能力構造モデルの構築	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 臨床リウマチ	6. 最初と最後の頁 8-10
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.14961/cra.33.207	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 西村明子, 神崎初美	4. 巻 2
2. 論文標題 リウマチ膠原病患者へのプレコンセプション・ケアに関する看護師のニーズ調査	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 リウマチ看護学会誌	6. 最初と最後の頁 1-3
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 神崎初美, 戸ヶ里泰典, 畑真紀子, 他	4. 巻 in press
2. 論文標題 関節リウマチ患者の心理的適応尺度の開発	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 臨床リウマチ	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 戸ヶ里 泰典	4. 巻 25
2. 論文標題 看護実践における健康生成論とストレス対処力概念: SOC (sense of coherence) の応用	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 聖路加看護学会誌 = Journal of St. Luke 's Society for Nursing Research	6. 最初と最後の頁 46 ~ 50
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.34414/00016551	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Togari Taisuke, Yoshioka-Maeda Kyoko	4. 巻 27
2. 論文標題 Coping and Growth among Isolated Male Workers Following the Fukushima Daiichi Nuclear Accident	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Journal of Loss and Trauma	6. 最初と最後の頁 229 ~ 243
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1080/15325024.2021.1932132	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 戸ヶ里 泰典	4. 巻 10
2. 論文標題 SOC (sense of coherence : 首尾一貫感覚)	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本看護評価学会誌	6. 最初と最後の頁 69 ~ 74
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.11463/jja.10.69	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 生方 剛, 谷木 龍男, 戸ヶ里 泰典	4. 巻 89
2. 論文標題 サイクリストにおけるサイクリングの経験とフロー体験, 心理学的レジリエンスの関係	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 日本健康学会誌	6. 最初と最後の頁 15-29
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.3861/kenko.89.1_15	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Taisuke Togari , Yoji Inoue , Gaku Oshima , Sakurako Abe , Rikuya Hosokawa , Yosuke Takaku	4. 巻 19
2. 論文標題 Socioeconomic status and the sense of coherence among Japanese people living with HIV	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 International Journal of Environmental Research and Public Health	6. 最初と最後の頁 7673
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.3390/ijerph19137673	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 水野哲也, 谷木龍男, 戸ヶ里泰典	4. 巻 88
2. 論文標題 大学生における健康に関連する精神的フィットネスの検討 理論モデル並びに測定尺度作成の試み	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日本健康学会誌	6. 最初と最後の頁 41-59
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.3861/kenko.88.2_41	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田畑真澄, 戸ヶ里泰典	4. 巻 59
2. 論文標題 介護老人保健施設の職場風土良好度の因子不変性とSense of Coherenceとの関連 横断調査における介護職と看護職の多母集 団同時分析より	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日本医療・病院管理学会誌	6. 最初と最後の頁 99-109
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.11303/jsha.59.99	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 戸ヶ里泰典	4. 巻 29
2. 論文標題 COVID-19パンデミック対策における健康生成論の可能性	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本健康教育学会誌	6. 最初と最後の頁 102-108
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.11260/kenkokyoiku.29.102	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 戸ヶ里泰典	4. 巻 29
2. 論文標題 健康教育・ヘルスプロモーションとCOVID-19	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本健康教育学会誌	6. 最初と最後の頁 77-78
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.11260/kenkokyoiku.29.77	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 戸ヶ里泰典	4. 巻 39
2. 論文標題 健康生成論の視座と総論－思春期と健康生成モデル・健康生成論的アプローチ	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 思春期学	6. 最初と最後の頁 42-47
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 戸ヶ里 泰典	4. 巻 41
2. 論文標題 思春期の「生きづらさ」への支援における健康生成論・Sense of Coherence の可能性	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 思春期学	6. 最初と最後の頁 39-43
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 戸ヶ里泰典	4. 巻 44
2. 論文標題 SOCの考え方 理論的背景と進展, 日本語版SOCスケール	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 産業医学ジャーナル	6. 最初と最後の頁 4-8
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 久富和子, 戸ヶ里泰典	4. 巻 26
2. 論文標題 精神科専門病院に勤務する看護師が直面する倫理的ジレンマの実態と精神的ストレスとの関連	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 看護管理学会誌	6. 最初と最後の頁 115-128
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.19012/janap.26.1_115	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計34件（うち招待講演 11件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 神崎 初美 , 戸ヶ里泰典, 畑 真紀子 , 井上 満代
2. 発表標題 関節リウマチ（RA）患者の心理的適応とSOCとの関連
3. 学会等名 第43回日本看護科学学会学術集会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 神崎 初美 , 戸ヶ里泰典, 畑 真紀子, 井上 満代, 日高 利彦 , 黒木喜美子, 三浦 靖史 , 村澤 章 , 松井 聖
2. 発表標題 関節リウマチ患者の心理的適応に影響する要因の分析
3. 学会等名 第38回日本臨床リウマチ学会総会・学術集会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 神崎初美・畑 真紀子, 井上 満代, 日高 利彦, 三浦 靖史, 村澤章, 松井 聖
2. 発表標題 関節リウマチ患者の心理的適応尺度の開発
3. 学会等名 第67回日本リウマチ学会総会・学術集会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 神崎 初美
2. 発表標題 関節リウマチ患者のリハビリに関する尺度の開発～質問項目作成過程～
3. 学会等名 第66回日本リウマチ学会総会・学術集会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 竹内朋子, 戸ヶ里泰典, 山西文子
2. 発表標題 看護組織のSense of Coherenceスケール -信頼性と妥当性の検証 -
3. 学会等名 第27回 日本看護管理学会学術集会 (招待講演)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 井上洋士, 戸ヶ里泰典.
2. 発表標題 日本国内在住のLGBTQ+の人々におけるSOC (sense of coherence) についての調査研究
3. 学会等名 第82回日本公衆衛生学会総会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 井上洋士, 戸ヶ里泰典.
2. 発表標題 日本国内在住のLGBTQ+の人々におけるSOC(sense of coherence)とネガティブ経験と の関連
3. 学会等名 第37回日本エイズ学会学術集会・総会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 井上洋士, 戸ヶ里泰典
2. 発表標題 日本国内在住のLGBTQ+の人々におけるSOC(sense of coherence)についての調査研究
3. 学会等名 第82回日本公衆衛生学会総会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 神崎初美、戸ヶ里泰典、畑真紀子、他
2. 発表標題 関節リウマチ（RA）患者の心理的適応に影響する要因の分析
3. 学会等名 第38回日本臨床リウマチ学会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 神崎初美、戸ヶ里泰典、畑真紀子
2. 発表標題 関節リウマチ（RA）患者の心理的適応とSOCとの関連
3. 学会等名 第43回日本看護科学学会学術集会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 川村佳祐、戸ヶ里泰典
2. 発表標題 パーキンソン病患者におけるヘルスリテラシーおよびセルフマネジメントの健康関連Quality of Lifeへの関連
3. 学会等名 第31回日本健康教育学会大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 井上洋士、戸ヶ里泰典
2. 発表標題 日本国内在住のLGBTQ+の人々におけるSOC(sense of coherence)とネガティブ経験との関連
3. 学会等名 第37回日本エイズ学会学術集会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 戸ヶ里泰典、井上洋士、大島岳、他
2. 発表標題 HIV陽性者に対するうつ傾向に対するソーシャルサポートネットワークの関連性
3. 学会等名 第37回日本エイズ学会学術集会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 戸ヶ里泰典、井上洋士、大島岳、他
2. 発表標題 HIV陽性者におけるうつ傾向に対するスティグマの認知およびソーシャルサポートの関連性
3. 学会等名 第37回日本エイズ学会学術集会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 戸ヶ里泰典、井上洋士、米倉佑貴
2. 発表標題 感染判明後4年未満のHIV陽性者におけるストレス関連成長とスティグマの実態と推移 当事者参加型リサーチによる3回の調査結果より
3. 学会等名 第29回日本健康教育学会学術大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 白川雪乃、戸ヶ里泰典
2. 発表標題 成人前期における健康観とヘルスリテラシーならびに健康との関連 web横断調査による検討
3. 学会等名 第29回日本健康教育学会学術大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 戸ヶ里泰典
2. 発表標題 看護実践における健康生成論とストレス対処力概念SOCの応用
3. 学会等名 第26回聖路加看護学会学術大会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 戸ヶ里泰典, 井上洋士, 高久陽介, 大島岳, 他
2. 発表標題 HIV 陽性者におけるアルコール依存状況 とその関連要因
3. 学会等名 第35回日本エイズ学会学術集会・総会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 戸ヶ里泰典、竹内朋子
2. 発表標題 一般労働者における組織SOC(sense of coherence)尺度の適用可能性 インターネット調査データからの検討
3. 学会等名 第30回日本健康教育学会学術大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 戸ヶ里 泰典, 井上 洋士, 高久 陽介, 大島 岳, ほか
2. 発表標題 HIV陽性者男性における差別不安および首尾一貫感覚とレクリエーションナルドラッグの使用との関連
3. 学会等名 第34回日本エイズ学会学術集会・総会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 戸ヶ里泰典
2. 発表標題 HIV情報提供とヘルスリテラシー
3. 学会等名 第34回日本エイズ学会学術集会・総会（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 戸ヶ里泰典
2. 発表標題 社会経済的地位とストレス対処力概念SOCとの関係からみた健康生成論と健康生成モデルの今日的な意義と可能性
3. 学会等名 第85回日本健康学会総会（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 戸ヶ里泰典
2. 発表標題 健康生成論の視座と総論 思春期と健康生成モデル・健康生成論的アプローチ
3. 学会等名 第39回日本思春期学会総会・学術集会（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 戸ヶ里泰典
2. 発表標題 SOC（Sense of Coherence、首尾一貫感覚）：ストレスに強く健康に生きる力に関する理論と測定
3. 学会等名 第10回日本看護評価学会学術集会（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 岩田恵子、戸ヶ里泰典
2. 発表標題 九州北部地方の総合病院勤務看護師における感情労働の実態と 属性および首尾一貫感覚との関連
3. 学会等名 第39回日本看護科学学会学術集会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 戸ヶ里泰典、井上洋士、大島岳、阿部桜子、細川陸也、他
2. 発表標題 日本人HIV陽性者におけるストレス関連成長の実態とその特徴
3. 学会等名 第33回日本エイズ学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 戸ヶ里泰典
2. 発表標題 SOC (sense of coherence) 概念とレジリエンス
3. 学会等名 第13回日本慢性看護学会学術集会 (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 戸ヶ里泰典
2. 発表標題 SOC (Sense of Coherence、首尾一貫感覚) : ストレスに強く健康に生きる力に関する理論と測定
3. 学会等名 第10回日本看護評価学会学術集会 (招待講演)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 水野哲也、戸ヶ里泰典、谷木龍男
2. 発表標題 健康関連の精神的体力(health-related mental fitness) -概念の整理と測定の試み-
3. 学会等名 第84回日本健康学会総会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 戸ヶ里泰典
2. 発表標題 シンポジウム5「日本のセクシュアルヘルスと予防啓発 検査 + Condom、U=U、PrEP - これから考えていくべきことは何か？」一般市民のHIV陽性者に対するパブリックスティグマとU=Uの知識
3. 学会等名 第36回日本エイズ学会学術集会・総会（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 戸ヶ里泰典
2. 発表標題 HIV陽性者における市販薬乱用の実態と背景:第3回Futures Japan調査より
3. 学会等名 第36回日本エイズ学会学術集会・総会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 戸ヶ里泰典
2. 発表標題 シンポジウム「療養支援_セクシャルマイノリティの心理的背景と心理・社会的支援」HIV Futures Japan 第3回調査にみるセクシャルマイノリティのメンタルヘルスの実態
3. 学会等名 第36回日本エイズ学会学術集会・総会（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 戸ヶ里泰典
2. 発表標題 シンポジウム1「生きづらさを抱えた思春期への支援」思春期への支援における健康生成論とSOCの可能性
3. 学会等名 第41回日本思春期学会総会・学術集会（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 戸ヶ里 泰典, 竹内朋子
2. 発表標題 公開 一般労働者における組織SOC(sense of coherence)尺度の適用可能性 インターネット調査データからの検討
3. 学会等名 第30回日本健康教育学会学術大会
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	山崎 喜比古 (Yamazaki Yoshihiko)  (10174666)	放送大学・教養学部・客員教授  (32508)	
研究分担者	谷木 龍男 (Yagi Tatsuo)  (30581574)	東海大学・体育学部・准教授  (32644)	
研究分担者	竹内 朋子 (Takeuchi tomoko)  (70636167)	東京医療保健大学・看護学部・教授  (32809)	

## 6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担者	神崎 初美  (Kanzaki Hatsumi)  (80295774)	兵庫医科大学・看護学部・教授    (34519)	
研究 分担者	井上 洋士  (Inoue yoji)  (60375623)	順天堂大学・大学院医療看護学研究科・特任教授    (32620)	削除：2022年1月14日
研究 分担者	本江 朝美  (Hongo Asami)  (80300060)	横浜創英大学・看護学部・教授    (32727)	

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 協力者	田畑 真澄  (Tabata Masumi)		
研究 協力者	中島 泰葉  (Nakajima Yasuha)		
研究 協力者	川村 佳祐  (Kawamura Keisuke)		
研究 協力者	久富 和子  (Hisadomi Kazuko)		

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	関永 聡子  (Sekinaga Satoko)		
研究協力者	白川 雪乃  (Shirakawa Yukino)		
連携研究者	水野 哲也  (Tetsuya Mizuno)  (30126255)	東京医科歯科大学・教養部・非常勤講師    (12602)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関